



## 私の出会った世界で活躍する日本人たち

近内 亜紀子（IAEA原子力安全保安局輸送安全室所属）

IAEAに赴任して早1年が経とうとしています。この海外便りを執筆するのも、今回が最後になりました。この冊子が出版される頃には、私は日本に戻っている予定です。ウィーンでは色々な方に出会いました。最終回は、IAEAにおける日本人について感じたことを書いてみたいと思います。

IAEAの発行している年次報告によると、IAEAには2474人（2011年12月時点）の職員が働いており、天野事務局長をはじめ日本人職員は約60人在籍しています。これは加盟国158カ国が均等に人を派遣していると仮定した16人よりは多いですが、全体に占める日本人職員の割合は3%未満で、日本の分担金は米国について2番目に多い約12.4%（2012年）である事を考慮すると、分担金に比較して低い割合だということが分かります。さらに60名の中には私のようなCFE（コストフリーエキスパート）と呼ばれる、派遣元が費用を負担しているケースも含まれるため、それを考慮するともっと低い割合です。

しかしながら、IAEAで働く日本人職員の方達は、それぞれ仕事熱心で個性豊かで、お話をするのはとても刺激的でした。IAEA本部はVIC（Vienna International Centre）の国連ビルの一部に入っており、同じビル内には15機関程度の国連機関および国際関係機関が入っています。VIC内の国際機関を中心に日本人職員有志によりUNVJ（国連ウィーン日本委員会）という会が組織され、IAEAのみでなく、UNIDO（国連工業開発機関）や年間自然放射線被ばく線量2.4 mSvの報告書で一般に知られるようになったUNSCEAR（原子放射線による影響に関する国連科学委員会）、VICの他にもウィーン郊外に東西冷戦期間から続く共同研究所IIASA（国際応用システム分析研究所）やウィーン工科大学の方も参加され、異なる分野の方々と話をする機会に恵まれました。またIAEAでの会議参加のために日本からウィーンに出張された方々、国連機関と日本との間で働かれている在ウィーン国際機関日本政府代表部や日本原子力研究開発機構ウィーン事務所の方々と色々な出会いがありました。

1年間、IAEA職員として国際機関で働いて、これまで加盟国代表団として参加していた会議に事務局側として参加することで、今までとは異なる立場から日本を見る機会になりました。国際機関では様々な人種の方が働いて



いますし、会議にも様々な考えを持った人が集まります。考え方の多様性の幅が日本で仕事をするのと一番異なる部分であり、日本の中だけで議論することの是非を考えさせられました。国際規則策定のための会議は、学術会議での議論とは異なり、合理性や科学的根拠のみでは動かせないものを感じることがあります。科学的に正しいことを発信し続けることはもちろん大切ですが、話し合いの中でお互いに理解し、合意を形成するために努力をすることが大切と感じています。日本から来る様々な方と会議で一緒にさせていただき、日本の専門家が継続的な貢献をしていると感じる一方で、本当はもっと貢献ができるのではと感じることもありました。日本からの発表資料は一般に情報が多くよく準備されていますし、各国提案に対しても国内の調整をきちんとしてくるところなどは国際社会でも評価されています。しかしながら、政策方針に基づく戦略性や国際社会に貢献する発信がやや足りないのではないかと思います。IAEAは会議の実施母体ではありますが、会議は加盟国の参加者で成立させるものであり、議論が必要と思われる議題や自国での経験や問題を積極的に提供する必要があると思います。日本からの発表は、成功例の情報提供や終了した研究成果報告などを求められて行うことが多いように思いましたが、自国で困っていることや実施中の研究なども適宜議題として提案したらよいのではないかと思います。また、議論の継続性のためには、毎回の会議に対処方針を作るだけでなく、前回会議の結論を基に懸案事項を継続的に検討していくことが大切だと感じました。これらは、日本に帰ってから私の課題でもあると思います。今後の仕事について決意を新たにするとともに、IAEAでの仕事を支えてくださった関係者の方々に、この場を借りてお礼申し上げます。